

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2014年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

2014.12

第51号

空気を読む

親鸞仏教センター研究員 名和 達宣

小学生のころ、巷でミネラル・ウォーターが流通し始めた。蛇口をひねれば水は流れる。なぜ、わざわざお金を払ってまで買わなければならないのか、と疑問に思った。しかし、今やペットボトル水は、日常の生活に欠かせないものとなっている。いつのころからか、水道水の飲用を極力避けるようにもなった。当時、クラスの友人たちと「将来的には空気も売られる日が来るかもしれない」と冗談めいて話していたが、酸素の販売や空気清浄器の流行など、すでに現実化されつつある。生活必需品となる時代の到来も、決して遠くはないだろう。

その一方で、思春期に入ったあたりから、猛烈に感じ出した問いがある。

——この息苦しさは何だろう。

空気とは本来、人間を「活かす」ものはず。ところが、時にわれわれは、その空気によって自分を失い、生の実感が損なわれてしまう。それは、同調圧力や仲間意識、暗黙の了解というかたちで身に迫り、有無を言わず、周囲の空気を読むことが強要される。そこに生じる息苦しさは、吸えないことよりもむしろ、安心して吐けない、あるいは「本音」が押し殺されるところに起因するのではないだろうか。

今から百十余年前、東京本郷の地に浩々洞を結

んだ清沢満之のもとへ、時代のはざ間で煩悶する多くの青年が集った。彼らは明治という新時代の空気に取り残されまいと必死だった。自由と平等を謳う思潮に乗じ、立身出世を志しながらも、誰もが自らの境遇に落ち着くことができなかった。そして、家族や社会との関わりのなかで倫理上の問題に喘いだ。そのような、言わば呼吸困難に陥った煩悶青年たちに、清沢は「倫理以上の安慰」を説いたのである。ある者はその一言によって「深い海底から浮かび出たような気持ちになった」と述懐する。それゆえ、浩々洞には「特別の空気」が流れ、「議論と大笑いの僧伽」とも称されるような、安心して「本音」の吐ける場が——真宗の本尊を中心に——展開されたと伝えられる。

現代においてわれわれは、伝記や評論などの書物をとおして、ある時代のある場所に、確かに「僧伽」が存在したという事実を知らされる。しかし、そのことが過去の事績への憧憬や人物崇拜にとどまるならば、真にその書を読み解いたとは言えないのではないか。思想を学ぶとは、書物のなかに流れる「空気」を呼吸し、現前の境遇を生き抜くことでなければならないだろう。

東京本郷の地に立つ当センターには、今も浩々洞からの風が吹いている。

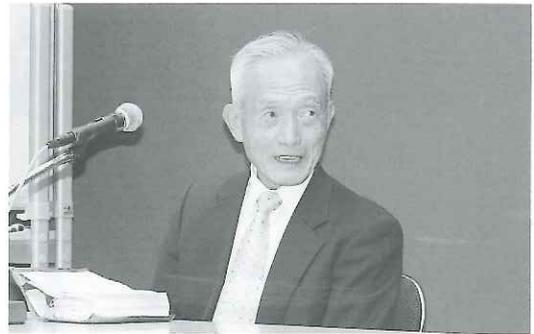
親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③〇

諸仏を供養するという課題

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第71回～75回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第71回では「寂滅」等について、第72回、73回では「少欲知足」等について、第74回では「和顔愛語」等について、第75回では「三解脱門」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第69回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 供養一切仏の願い

「重誓偈」のなかに、「供養一切仏」（『真宗聖典』26頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略称）という言葉があります。この供養一切仏ということは、本願のなかで言うと、第二十三願が「供養諸仏の願」と名づけられています。これは、その前の第二十二願、いわゆる「還相回向の願」を受けています。その第二十二願では、浄土に触れたならばもう一生補処、必ず仏に成るとということが与えられている位である。でも、他の国に行って菩薩行を修する仕事をしたいというなら、どうぞ出ていってくださいと。その菩薩行の内容が「十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して」（『聖典』19頁）と言われているわけです。

なぜ一切仏を供養するというのを法蔵菩薩が大切な願として誓うのだろうか。私は疑問をもったのです。菩薩道にとっては、「開化衆生」と「諸仏供養」はもうセットになっていて、自利利他で言うなら、開化衆生は利他です。それに対して自利の課題が諸仏供養に対応するかたちになっているのです。

そう思っていたときに、ふと思い起こしたのが、天親菩薩の『浄土論』の解義分です。その第五回向門に対応するところになると、「巧方便回向を

成就す」（『聖典』143頁）とあって、巧方便回向成就とはどういうことかということ、「礼拝等の五種の修行をして集むるところの一切の功德善根をして、自身の住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲うがゆえに」（同上）と。自分のための楽しみは求めない、一切衆生の苦悩を抜きたいのだと。これが大乘の願いなのです。さらにその次の段で、「智恵門に依って自樂を求めず、我が心、自身に貪着することを遠離するがゆえに」（同上）。自分の楽しみは求めない、貪着とは愛着、自分に愛着することを離れるのだと言われる。さらに、「一切衆生を憐愍して、心、自身を供養し恭敬する心を遠離せるがゆえに」（同上）と。そのように、衆生を救いたいのだと、自分を供養するのではないのだと、何回も何回もしつこく言うのです。

それで「ああ、そうか」と気づいたのです。「諸仏供養」ということと、この『浄土論』の「自身を供養し恭敬する」こととは、まったくの反対概念として対応しているのだと。諸仏を供養することがなぜ自利なのか。自利ということは、自分が仏に成るということ。その自利のために修行する。そのときに、自分を供養し恭敬するという心が残ったままで修行すると、これだけ修行した、偉いものだと、そういう心が天狗の鼻のように高くなる。そういう修行をしたら無意味なのです。ですから、あらゆる世界に行って、自分に先だって仏に成った存在を供養するという願いが法蔵菩薩の願いなのです。

■ 自身を供養することを求めず

これは痛いところだなと思いました。自身を供養し恭敬する。自分を供養するというのは、つまり、自分のことを自分で「ああ、お前ご苦労さんだったな」と言って、「ご苦労だったから何かうまいものでも食べるか」と、自分にいわばお供えをする。われわれはそういうところがあります。人からほめてもらえばそれでよい面もあるけれど、

親鸞仏教センターの動き

(2014年5月～10月) 一抄出

■ 2014年

- 5/7 第46回『尊号真像銘文』研究会
5/9 親鸞聖人ご命日のつどい
5/14 第141回清沢満之研究会
5/23 第13回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
第71回(通算第122回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
5/28 第163回英訳『教行信証』研究会
6/1 中村玲太研究員が発令
6/3 第11回親鸞仏教センター研究交流サロン「生
きづらさから考えるー『物語』の可能性ー」児童文
学者:清水眞砂子氏、川崎医科大学精神科学教室主
任教授:青木省三氏(千代田区・大手町ファースト
スクエアカンファレンス)
6/13 親鸞聖人ご命日のつどい
6/18 第47回『尊号真像銘文』研究会
第72回(通算第123回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
6/20 第14回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
6/21 宗教と社会学会第22回学術大会(天理大学):
大澤囑託研究員発表「僧侶の女犯・妻帯の規制を背
景とした「親鸞妻帯」の言説—江戸幕府による法制
的施策と妻帯の宗風に関して—」
6/22 第3回日・韓・中 国際仏教学術大会(東洋大
学):中村研究員発表「顕意の元照批判に見る日中
浄土教の相違」
6/25 第3回センター会議(親鸞仏教センター)
第48回『尊号真像銘文』研究会(終了)
6/27 第142回清沢満之研究会
6/30 第47回現代と親鸞の研究會「改めて憲法とは
何かを考える」早稲田大学法文学術院教授:水島朝
穂氏(千代田区・国際フォーラム)
7/1 第164回英訳『教行信証』研究会
7/6 真宗大谷派教学大会(大谷大学):藤原研究員
発表「『化身土巻』所引『日藏経』への一試論—光味
仙人に注目して—」、名和研究員発表「僧伽の空気—
『清沢先生 信仰坐談』を読み解く—」
7/11 親鸞聖人ご命日のつどい
7/18 第73回(通算第124回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
7/20 西田哲学会第12回年次大会(西田幾多郎記念
哲学館):名和研究員発表「西田哲学と親鸞教学—
「逆対応」の可能性」
7/25 第15回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
7/28 第1回『西方指南抄』研究会
7/30 第143回清沢満之研究会
8/1 越部良一、法隆誠幸囑託研究員が再任
8/4 第16回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
8/6 第165回英訳『教行信証』研究会
8/8 親鸞聖人ご命日のつどい
8/19 第2回『西方指南抄』研究会
8/21 第74回(通算第125回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
8/24 西田幾多郎記念哲学館第34回夏季哲学講座
(7面へ続く)

誰もほめてくれないと、「これだけやったのに誰もほめてくれないのか、じゃ、しょうがない、独りでご馳走でも食べておくか」と。そういう根性が抜けないのです。自身を供養し恭敬する、それを遠離するのが菩薩なのだ。

このようなことを願っているということは、いかに人間は自我愛が強くて、自己関心が強いのか、それで自分を供養したいのです。そういう心が抜けない。そのことを何とも思っていないけれど、それが人間の心の闇を作っている。人間世界の闇もそうした心が作り出していく。そこに衆生を開化する行と並んで、諸仏供養こそが代表的な菩薩行だと。それを成就させるために、法蔵願心が、わざわざ諸仏供養の願を建てる。こういう意味なのだろうか。

諸仏を供養するということは、いまだ自分は凡夫であって仏に成れない、だから仏を供養することを忘れない。こういう因の位で果の位を仰ぐという課題を背負って歩むのが菩薩の仕事だと。こう考えると「諸仏供養の願」が大事だという意味が少しくなずけるのではないかと思うのです。その果の位というのは実体的に何かあるというよりも、自分にとって尊い存在、仰ぐべき存在を見失わないことが大事な自利の課題、みずからが仏に成っていく課題であると。

それを忘れるあり方を曇鸞大師は、「上に諸仏の求むべきを見ず、下に衆生の度すべきを見ず」(『聖典』286頁)と。これは、菩薩の修行の第七地の段階にくると難関がある。もう自分は覺りを開いたから、これでよいのだとなってしまう。そうなるとうるむべき仏もない、たすけるべき衆生もないと。これを「七地沈空の難」と言っていて、空に沈むことだと。こういうことを曇鸞大師が言っているわけです。

ですから、仏道とは終わりが無い。求める心に立って、どこまででも歩ませてもらうのが仏道であって、結果に立ってしまうということをしたら、それで終わり。地獄以下に落ちてしまう。こういう厳しいところがあるわけです。

「自身の住持の樂を求めず」ということは、言うのは簡単だけれど、人間はその魅力には勝てないのです。自分のための楽しい精神空間に触れて、それに埋没してしまう。楽しいことが強ければ強いほど、そのなかに埋没する。むしろ、突き放されて苦悩があれば歩まされるというところに、限りなく諸仏を供養するという課題が引っ張って、歩ませてくれるのだと思うのです。

(文責:親鸞仏教センター)

本研究会では、「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起いただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第47回

改めて憲法とは何かを考える

早稲田大学法学学術院教授
水島朝穂氏



水島朝穂氏

2014年6月30日に、早稲田大学教授の水島朝穂先生をお招きして「現代と親鸞の研究会」を開催した。「改めて憲法とは何かを考える」と題された講義は集団的自衛権の問題点や、憲法とは何かという本質的な議論まで多岐にわたって行われた。翌日には安倍内閣により集団的自衛権の行使が閣議決定されるという歴史的な1日に開催された講義の一端を以下に紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 田村晃徳)

■25年ごとの変化

皆さんもいろいろなところでお聞きになっていると思いますが、今年は1914年に第一次世界大戦が始まってから100年にあたります。この大戦は人類史に巨大な変化を与えました。本格的に飛行機による空中戦が始まったのもこの大戦からです。この戦争の性格と内容が今日の集団的自衛権を考えるうえでも前提となります。

歴史は大体25年間で変化していきます。第一次世界大戦の25年後は1939年です。つまり今年は、第二次世界大戦が始まってから75周年なのです。そしてその25年後は1964年です。この年は東京オリンピックが開催されましたが注目すべきはそこではなく、トンキン湾事件です。アメリカのマクナマラ国防長官(当時)が、ちょうど今の安倍首相のようにパネルを用いて説明していました。トンキン湾でアメリカの駆逐艦がベトナムの魚雷艇に攻撃された。つまり奇襲されたので、自衛権の行使としてアメリカはB-52で北ベトナムに対する本格的な爆撃を開始しました。その後、このトンキン湾事件はアメリカによる謀略であったことがわかるのです。しかし、自国は攻められてい

ない韓国やオーストラリアも集団的自衛権を前提にした条約をアメリカと結んでいるので、ベトナム戦争に参戦しました。集団的自衛権行使の悲惨な例が50年前にあったのです。当時はアメリカの攻撃を自衛権だからやむをえないという論調もありましたが、事実はアメリカによるでっちあげだったのです。

それでは、1964年の25年後である1989年には何があったのでしょうか。ベルリンの壁崩壊です。アメリカはベトナム戦争の敗北でダメージを受け、それが後に大きなトラウマとなりました。集団的自衛権の仕組みであったのがNATOとワルシャワ条約機構です。そして冷戦時代の米ソの代理戦争がベトナム戦争なのです。その冷戦の象徴であったベルリンの壁崩壊が1989年でした。

そしてソ連は崩壊しました。アメリカは一極支配というかたちで世界に君臨しました。しかし、^{ごう}傲慢な一國資本主義、金融資本主義は2008年のリーマンショックで一気に崩れ落ちました。第一次と第二次の世界大戦の間にも大恐慌が起きています。そして今年はベルリンの壁崩壊から25周年であり、第一次世界大戦開戦から100年です。このように、歴史の節目で経済、政治、そして謀略にしても不思議なかたちで繰り返されていたのです。

■憲法とは何か

そして明日7月1日を迎えるようとしています。集団的自衛権の行使を閣議決定で認めることになります。いわば憲法の実質的改正です。これは今日までと明日以降とで戦後史は大きく変わります。日本の世界に対するパラダイムが変わりま

す。それほどの大きな枠組みの変化が起きるわけ
です。

憲法を変えるにしろ変えないにしろ、「憲法と
は何か」がわからないと議論はできません。最近、
私は講演などで「私たち国民が守らなくていい唯
一の法」だと話します。なぜかと言えば憲法を守
るべき人を、憲法自身が指名しているのです。そ
れが憲法第99条です。そこには「天皇又は摂政及
び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、
この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ」とありま
す。ここに「国民」は入っていません。逆に言え
ば、国民は憲法尊重擁護義務を負っていないので
す。それを負っているのは、憲法を破る可能性を
もつ、権力者だけなのです。ですから、憲法とは
私たち国民が守らなくていい唯一の規範であり、
国民が権力者に守らせる規範であると言えるので
す。憲法とは権力者を縛り、統制し、制限するも
のです。

■立憲主義と民主主義

ここで「立憲主義」について説明します。今ま
で、皆さんが憲法を学ぶときに立憲主義について
は教わらなかったのではないのでしょうか。新憲法
制定時に「あたらしい憲法のはなし」という教材
が中学生用に当時の文部省により作成、配布され
ました。今でも護憲派によく読まれて役に立
つ本ですが、弱点がありました。それは「憲法は
私たちが守っていかなければならない」という記
述が多いのです。そのような思いを子どもたちに
植え付けてしまったのです。しかし、そうではな
く国家権力が私たちが侵害することから守るのが
憲法なのです。そのような経緯もあり、立憲主義
を強調するようになったのは80年代以降なので
す。それまでは民主主義が中心でした。実は憲
法学においては、立憲主義と民主主義とを混乱し
て説明してきたのです。人権の保障も民主主義の
内容であり、少数者の擁護が重要であるとされて
きました。しかし、民主主義とは突き詰めると
「多数決」であり、多数者の立場を重視するの
です。立憲主義は違うのです。多数者ではなく少
数者を守るために立憲主義はあるのです。つまり、



現代と親鸞の研究会 於：東京国際フォーラム

端的に言うと立憲主義は「反多数者主義」なので
す。民意を最重視する政治家もいます。彼らは政
策を実行するのに「民意だから」と言いつつ、個
人の権利を侵害してきます。それを「民意にもか
かわらず」と少数者を守るのが立憲主義なので
す。立憲主義の心は「人権の保障」と「権力の分
立」、つまり「権力の統制」だと言えます。だから
こそ、権力者の側から憲法改正の条件を緩和する
という話が出ることはおかしいのです。

(文責：親鸞仏教センター)

水島 朝穂 (みずしま あさほ) 氏

早稲田大学法学学術院教授

1953年、東京都府中市生まれ。83年札幌学院大学助
教授、89年広島大学助教授を経て、96年より現職。憲
法、法政策論。法学博士。99年～00年ボン大学で在外
研究。憲法理論研究会(創設者・鈴木安蔵)前代表、
全国憲法研究会代表(2015年まで)ほか。

単著に『18歳からはじめる憲法』(法律文化社)、『東
日本大震災と憲法』(早稲田大学出版部)、『戦争とたた
かう一憲法学者・久田栄正のルソン戦体験』(岩波現
代文庫)、『はじめての憲法教室—立憲主義の基本から
考える』(集英社新書)など多数。編著に『平和憲法の
確保と新生』(北海道大学出版会)、『長沼事件・平賀書
簡』(日本評論社)、『憲法裁判の現場から考える』(成
文堂)など多数。共著に『改憲の何が問題か』(岩波新
書)、『検証・防空法—空襲下で禁じられた避難』(法律
文化社)、『集団的自衛権の何が問題か—解釈改憲批
判』(岩波書店)など多数。

NHK ラジオ第1放送「新聞を読んで」レギュラー
14年(2011年番組終了)。ホームページ(「平和憲法の
メッセージ」<http://www.asaho.com/>)

なお、当センター『アンジャリ』第28号に「これからの
憲法のはなし」をご執筆いただいている。

中世からいまを照らす 親鸞思想の現代的意義

親鸞仏教センター研究員 藤原 智



佐藤弘夫 氏

佐藤 弘夫 (さとう ひろお) 氏

東北大学大学院文学研究科教授

1953年宮城県生まれ。1978年東北大学文学研究科博士課程前期課程修了。盛岡大学助教授、東北大学文学部助教授を経て現職。東北大学博士（文学）。

近著に、『起請文の精神史 中世世界の神と仏』（講談社選書メチエ）、『神国日本』（ちくま新書）、『死者のゆくえ』（岩田書院）、『ヒトガミ信仰の系譜』（岩田書院）など多数。

近共編著に、『日本文化論キーワード』（有斐閣双書）、『日本思想史講座 全4巻』（ぺりかん社）、『岩波講座 日本の思想 全8巻』（岩波書店）など。

2014年8月26日、東京国際フォーラム（有楽町）において、東北大学大学院文学研究科教授である佐藤弘夫氏をお招きし、「中世からいまを照らす—親鸞思想の現代的意義」というテーマで、『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会を開催した。中世という時代を生きた親鸞はどのような宗教的世界観に身を置いていたのか、そしてそのことを踏まえながら現代を生きる者が鎌倉仏教を学ぶ意義について、お話いただいた。ここにその研究会の一部を紹介する。

■ 鎌倉仏教研究の過去・現在・未来

昔は日本思想史と言うと、二つの大きなピークがありました。一つは鎌倉仏教、もう一つは江戸時代の思想です。ところが今の研究の中心は近代仏教に様変わりしています。もしくは、同じ仏教のなかでも密教や修験道などの非常に生々しい儀礼などに焦点が移っています。ではなぜ日本仏教研究の主戦場が移行してしまったのでしょうか。

そもそも近代に入るなかで、鎌倉仏教が近代を先取りするものとして注目されていきます。おおよそ百年間にわたって、日本は近代を追い続ける問題意識で日本の思想をとらえていくということが行われました。しかし、その傾向は1970年代辺りから非常に大きな転機を迎えます。高度成長期が終わり、近代が生み出した弊害のほうがかつて大きな問題になってきたのです。ある時期から、大きな視点から鎌倉仏教を考える場合に、その前提となる立場そのものが崩れ落ちてしまうという現象が起こったのではないかと考えています。

鎌倉仏教のイメージは、鎌倉仏教の実像ではなくて、近代の人たちが自分たちの欲望に従って鎌倉仏教を解釈していった結果だったのではないのでしょうか。ですから、当然のことながら鎌倉仏教そのものよりも、それを近代的に解釈していった近代仏教のほうがおもしろいというような問題意識の転換が出てくるわけです。

要するに、近年における鎌倉仏教研究の低迷の最大の原因は、時代思潮と研究方法の大幅な転換にもかかわらず、明治初期より百年にわたって前提としてきた近代化の文脈に代わる、新たな語りの方を見いだしていないことにあります。それを変えるためには、中世人の目で、どのように見えていたのかをもっと考える必要があるということです。

そして、近代の成熟のなかで浮かび上がってくるさまざまな問題を根本から見ていくためには、近代そのものをもっと長い射程のなかで相対化する視点が必要でしょう。むしろそのときに、近代の解釈を離れた鎌倉仏教の研究が、近代を相対化するうえで非常に重要な視点を提供しうるのではないのかと考えています。

そのことを踏まえながら、親鸞が生きた鎌倉時代の世界観の一端を考えてみたいと思います。

■ 鎌倉仏教の可能性

親鸞の生きた13世紀から現代まで、どこで大きな世界観の転換が起こっているかをきちんと明らかにしていくことが、鎌倉仏教の時代から現代を見直すときに、大変重要な作業になります。では、どのようなかたちでその転換は起こったのでしょうか。

中世人と近・現代人の世界観の一番の大きな転換は、やはり中世の人々は、この世界とは違うところに、理想の浄土が実在するのだ、そこに行く

ことが究極の目標なのだという、非常に揺るぎないリアリティをもっていました。ところが13世紀あたりに入ってから、次第にこの世の占める割合がどんどん大きくなっていき、死後の世界、あの世の占めるリアリティがどんどん希薄化します。平たく言ってしまうと、世俗化の現象が起こったのです。非常に近・現代人に近い感覚が広がり、そのような感覚がおそらく、江戸時代に入って定着していったと考えることができます。

ですから、親鸞が生きていた12、3世紀の人々が呼吸していた世界とわれわれが生きているこの世界はまったく違う世界なのです。それはいろいろな意味で違いますが、絶対的な救済者、あるいはこの世界を超えた理想世界のリアリティが、現代は決定的になくなっていくという大きな転換を経ていくと見ることができます。

それが実は非常に大きな問題に結びついてきます。中世から近代にかけての大きな世界観の転換を別の言葉で説明すると、近代化が社会のなかから人間以外のさまざまな存在を追い出してしまったと考えることができるのではないのでしょうか。例えば今、「世界」や「社会」という言葉を使ったとき、それを構成している構成員は、当然われわれ人間とすぐ思い浮かべます。しかし江戸時代、あるいは鎌倉時代まで遡ったとき、おそらくその当時の人々は、人間だけではなく、人間以外のさまざまなものが一緒になってこの世界を構成していると考えたのではないのでしょうか。例えばご先祖さまや死者、それがわれわれの側にいて、同じようにこの社会を作り上げて、ある役割を果たしている。あるいは神さま、仏さまがまぎれもなく実在して、この社会のなかでわれわれと一つのある世界を作り上げていると考えていたのではないのでしょうか。

近代は、そのように人間以外のものをこの世界、社会から放逐することによって、人間が緩衝材をなくすような結果になってしまったのではな



『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会 於：東京国際フォーラム

いでしょうか。ですから、われわれが近代をもう一度考え直すときに、やはりそのような目に見えない存在が果たしていた役割も見直す必要があるのではないかと考えています。

(文責：親鸞仏教センター)

※佐藤弘夫氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第30号(2015年6月1日号)に掲載予定です。

(3面から続く)

(西田幾多郎記念哲学館)：名和研究員発表「西田幾多郎と浩々洞一『清沢先生 信仰坐談』を手がかりとして」

8/26 第17回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会「中世からいまを照らす一親鸞思想の現代的意義」東北大学教授：佐藤弘夫氏(千代田区・国際フォーラム)

8/28 第144回清沢満之研究会

8/30 日本印度学仏教学会第65回学術大会(武蔵野大学)：藤原研究員発表「『教行信証』「化身土巻」所引『大集経』「忍辱品」への一試論―『往生要集』との連関から―」、中村研究員発表「西山義特殊名目「観門」の成立過程の再検討」

9/1 機関紙『親鸞仏教センター通信』第50号(記念号)を発行。

9/8 第48回現代と親鸞の研究会：第一部「悲愛の詩学」(講演)、第二部「悲しみと愛しみ」(質疑応答)、第三部「愛しみの彼方」(講演) 批評家：若松英輔氏(千代田区・東京堂ホール)

9/12 親鸞聖人で命日のつどい

9/14 日本宗教学会第73回学術大会(同志社大学)：藤原研究員発表「親鸞『教行信証』における『菩薩戒経』引用への一考察」、名和研究員発表「『精神主義』の思想的背景―清沢満之と雑誌『無尽灯』―」、大澤囑託研究員発表「康永本に見る親鸞の表象とその意義―『伝絵』の絵相比較から―」

9/17 第3回『西方指南抄』研究会

9/19 第145回清沢満之研究会

9/29 第166回英訳『教行信証』研究会

9/30 第18回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会

10/1 ステファン・グレイス囑託研究員が再任

10/9 第75回(通算第126回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)

10/10 親鸞聖人で命日のつどい

10/11 日本比較文学会第52回東京大会(二松學舎大学) 大澤囑託研究員発表「大正期恋愛至上主義を背景とした「結婚した親鸞」の表象―石丸梧平による「親鸞文学」を中心に―」

10/15 第4回『西方指南抄』研究会

10/22 第146回清沢満之研究会

10/29 第19回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会

10/31 第167回英訳『教行信証』研究会

■ 掲載論文

5月 『東アジア仏教研究』第12号(東アジア仏教研究会) 中村研究員「顕意、了恵の「四十八問答」の史料価値について」

『西方指南抄』を 紐解くにあたって

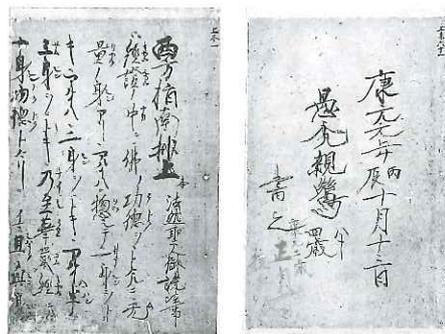
親鸞仏教センター研究員 中村 玲太

『西方指南抄』は法然（1133～1212）の遺文を集める最初期のものである。『西方指南抄』の第一に収められる遺文が「法然聖人御説法事」（以下、御説法事）であり、所収遺文中で最も長大な分量を誇っている。この「御説法事」は法然の「逆修」法要時の説法の記録である。中世の死生観を考えるうえで重要な「逆修」の信仰であるが、法然は単に「逆修」の思想を受容しておらず、そこには明瞭な法然の問題意識が見られる。本研究会を始めるに際し、法然と「逆修」の問題を通して「御説法事」の思想基盤を確認する。

1 「逆修」とは何か

法然と「逆修」の問題を考えるうえで、そもそも「逆修」とは何か、ということを確認しておきたい。「逆修」の理論的根拠としてたびたび指摘されるのが『随願往生経』である（大正21、529頁上以下参照）。『随願往生経』は十方に仏国土を想定し、その十方国土にはいかにして往生しえるかを問題にした経典である。ここで往生の主体として問題にされるのは、臨終にある人と亡者であるが、『随願往生経』は生者の追福によって中陰にある亡者がいかにして往生できるか（亡者が福を受け取る原理）、ということに経説の大半を費やしている。そして、亡者を往生せしめる功德があるのであれば、当然、自己の往生の助けともなるはずであり、ここから「逆修」の発想が登場する。自分が亡者となったときの親族の追福を頼みにするのではなく、あらかじめ（＝逆）福徳を修しておこう、として登場するのが「逆修」なのである。

『随願往生経』は浄土三部経とはずいぶん違う往生思想であるが、「逆修」の思想は広く日本の中世において浸透していた。特に日本においては「七分全得」という語が中世の願文に頻出する。



『西方指南抄』（左：冒頭、右：親鸞署名）

これは、亡者に追福すると七分の一の功德が亡者に行き、残りの七分の六は追福を行う生者のものとなる、という思想から、亡者となった自分を想定して追福、つまり「逆修」を行えば、七分の七の功德が得られるというものである。

この前提となる追福する側……七分の六、追福される側（亡者）……七分の一、という思想は先の『随願往生経』や『地藏菩薩本願経』が根拠とされる。しかし両経とも生前における亡者の行いを問題にして、「不信道德」、罪業のある者はいくら亡者となった後に親族から追福を受けたとしても、七分の一しかその功德を得られないことを説くものである。つまり、亡者であるから追福を七分の一しか受け取れないのではなく、生前の行いが問題で十分に功德を受けられないだけなのである。換言すれば、生前に「不信道德」でない者は、親族からの追福を七分の一以上受け取れるはずである。亡者の生前の行いを抜きにして固定した功德の配当を想定するのは、『随願往生経』や『地藏菩薩本願経』の原旨から飛躍した発想である。両経から飛躍した「七分全得」の思想がすでに『閻羅王受記経』（中国の道真受持本）に見られることから、中国からの影響も含めて改めて「逆修」の思想体系について検討する必要がある（日中で無関係に論理が飛躍した「七分全得」の思想が生まれたとは考えがたい）。これは今後の研究に期したい。

2 法然と「逆修」

中世においても時期によって「逆修」の形態には幅があるが、「四十九日」が一般化していったようである。「逆修」中において、「一七日」や「二七日」という節目で法要が営まれたが、そのときには阿弥陀仏、釈迦、薬師如来などさまざまな仏、菩薩が本尊とされ、また『法華経』など諸経が奉納された。これに対して法然の「逆修」法要の特徴は、弥陀一仏を本尊とし、所依の経典を『大無

量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』の浄土三部経に定めたことである（大谷旭雄『法然浄土教とその周縁』坤、533頁にすでに指摘がある）。法然は「逆修」法要中に、徹底的に弥陀一仏の功德を讃嘆し、浄土三部経について詳説しているが、これは従来の「逆修」に対する法然の「選択」の意志と言えるであろう。

法然における「逆修」の意義づけについては種々に論じられているが、私見を述べておきたい。法然は「逆修説法」において、「此逆修五十ヶ日間供仏施僧之営、併寿命長遠業也」（古本『漢語灯録』本、昭和法全250頁）としている。『随願往生経』の「逆修」には延命の功德も意図されていることはすでに指摘されているが、『随願往生経』における「逆修」の主眼はあくまで往生にある。日本においても後生の菩提を願って「逆修」が行われてきた例がほとんどであり、法然が「逆修」を「寿命長遠業」に限定して解釈しているのには法然独自の意図があると見るべきであろう。法然はおそらく「逆修」の功德を認めつつも、「逆修」と弥陀浄土への往生を関連づけたくはなかったのではないだろうか。このことは「逆修説法」以外において「逆修」の語られる唯一の法然遺文である「往生浄土用心」からもうかがえる。「往生浄土用心」には、「一。七分全得の事、仰のままに申けに候。さてこそ逆修はする事にて候へ。さ候へは、のちの世をとふらひぬべき人候はんも、それをたのますして、われとはけみて念仏申して、いそぎ極楽へまいりて……」（昭和法全、560頁）とある。法然は「逆修」の功德は認めつつも、「それをたのます」念仏して極楽を目指すことを説くのであり、「逆修」と弥陀浄土への往生とは峻別すべき、という意図がうかがえる。法然にしてみれば人から請われた「逆修」を機縁にして念仏往生を開顕することも厭わなかったのであろうが、その法要は「逆修」と弥陀浄土への往生との峻別が大前提にあったと言えよう。

3 「逆修」と「御説法事」

「御説法事」は「乃至」による省略が非常に多いが、そのなかでも「逆修」関連のことはすべて省略されている。もちろん、『漢語灯録』等の「逆修」の記述のほうが後世の付加とも考ええるが、しかし「御説法事」が「逆修」法要時の説法であるという大枠までを否定することはできない。つまり、

「乃至」が親鸞の手に依るものならば、ここに「逆修」を敬遠する親鸞の意図が読み込めるのである。仮に「乃至」が親鸞の手に依らずとも、「御説法事」の編者が「逆修」を敬遠していたと十分に推察される。このような「逆修」への態度は、法然に端を発した「逆修」観の一展開として注目される。

以上のように、法然は「逆修」という中世に浸透していた思想とせめぎ合いながら浄土教を明らかにせんとしていた。「御説法事」を読むうえで、このような法然の苦闘を背景として成立した遺文であることを念頭に入れるべきであり、本研究会でもこの点を注意して研究を進めていきたい。

■ 『アンジャリ』 第28号刊行 (2014年12月1日)

- 下田正弘「言語以前の声一経が仏となるとき」
- 水島朝穂「これからの憲法のはなし」
- 山崎亮「豊かさのデザイナー—コミュニティデザインとは何か—」
- 草郷孝好「幸福を大切にす地域社会と内発的協働」
- タテタカコ「道の途中」
- 池澤夏樹「列島が我々を作った」
- 川井博義「かなしみ、人間、共に在ること」
- 角幡唯介「生と死の巡礼」
- 皇紀夫「教育問題の解決とは？」
- 本多弘之「欲生心の象徴的自覚（6）」
- 名和達宣「自分自身よりも自分に近い言葉」



■ 『現代と親鸞』 第29号刊行 (2014年12月1日)

- 研究論文「『教行信証』「化身土巻」末における經典引用について——貫する問題意識としての邪見——藤原智／大正期親鸞文学における「人間親鸞」像の変容—倉田百三から石丸梧平へ—大澤絢子
- 現代と親鸞の研究会「西洋の近代と日本の近代」長谷川宏
- 「教行信証」「化身土巻・末巻」研究会「顕密体制と専修念仏」平雅行
- 第10回親鸞仏教センター研究交流サロン「生きづらさを考える—精神科外来から見えること—」発題：青木省三・コメンテーター：富岡量秀
- 第10回親鸞仏教センターのつどい「『カラマーゾフの兄弟』と二十一世紀現代」亀山郁夫／現代に向かった親鸞教の課題」本多弘之
- 研究ノート「西田幾多郎晩年の思索と『教行信証』—学習院西田幾多郎博士記念館（寸心荘）蔵書調査報告—」名和達宣
- 連続講座「親鸞思想の解明」「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—（16）」本多弘之

現代と親鸞 第29号



お
求
め
は
当
セ
ン
タ
ー
ま
で

原文

大勢至菩薩御銘文

『首楞嚴經』に言わく、「勢至獲念仏円通

「大勢至法王子 与其同倫 五十二菩薩 即從座起 頂礼仏足 而白仏言 我憶往昔 恒河沙劫 有仏出世 名無量光 十二如来 相繼一劫 其最後仏 名超日月光 彼仏教我 念仏三昧 乃至 若衆生心 憶仏念仏 現前当来 必定見仏 去仏不遠 不仮方便 自得心開 如染香人 身有香氣 此則名 曰 香光莊嚴 我本因地 以念仏心 入無生忍 今於此界 攝念仏人 歸於 淨土」已上略出

「勢至獲念仏円通」というのは、勢至菩薩念仏をえたまうともうすこととなり。獲というは、うるということばなり。うるというは、すなわち因位いんゐのとき、さとりをうるという。念仏を勢至菩薩さとりうるともうすなり。「大勢至法王子 与其同倫」というのは、五十二菩薩と勢至とおなじきともともうす。法王子とその菩薩とおなじきともともうすを、与其同倫というなり。「即從座起 頂礼仏足 而白仏言」ともうすは、すなわち座よりたち、仏の御あしを礼して仏にもうしてもうさくとなり。

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆獲 / 因位のとき、さとりをうる

■獲の字は、因位のときうるを獲という。得の字は、果位くわいのときにいたりてうることを得というなり。名の字は、因位のときのなを名という。号の字は、果位のときのなを号という。(五一〇頁『正像末和讃』『自然法爾章』)

■煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の數に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、必ず滅度に至る。(二八〇頁『教行信証』『証卷』)

◆念仏を……さとりうる

■念仏成仏はこれ真宗なり。仏言を取らざるをば、外道と名づく。(二七九頁『教行信証』『行卷』『五会法事讀』)

原文

「我憶往昔」というのは、われむかし、恒河沙劫のかずのとしをおもつといふところなり。「有仏出世 名無量光」ともうすは、仏、世にいでさせたまいしともうす御ことばなり。世にいでさせたまいし仏は、阿弥陀如来なりともうすなり。十二光仏、十二度世にいでさせたまうを、「十二如来 相繼一劫」ともうすなり。十二如来ともうすはすなわち阿弥陀如来の十二光の御名なり。相繼一劫というは、十二光仏の、十二度世にいでさせたまうをあいつくというなり。「其最後仏 名超日月光」ともうすは、十二光仏の、世にいでさせたまいしおわりの仏を、超日月光仏ともうすことなり。「彼仏教我 念仏三昧」ともうすは、かの最後の超日月光仏の念仏三昧を、勢至にはおしえたまうとなり。

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆十二光仏

■謹んで真仏土を案ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。(三〇〇頁『教行信証』『真仏土卷』)

■仏阿難に告げたまわく、「無量寿仏の威神光明、最尊第一にして、諸仏の光明の及ぶことあたわざるところなり。乃至このゆゑに無量寿仏は、無量光仏・無辺光仏・無碍光仏・無对光仏・炎王光仏・清浄光仏・歡喜光仏・智慧光仏・不斷光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏と号す。それ衆生ありて、この光に遇う者は、三垢消滅し、身意柔軟なり。歡喜踊躍し、善心生ず。(同『無量寿經』)

◆念仏三昧

■今、所修の念仏三昧に約するに、いまし仏力を憑む。帝王に近づけば、あえて犯すものなきがごとし。けだし阿弥陀仏、大慈悲力・大誓願力・大智慧力・大三昧力・大威神力・大摧邪力・大降魔力・天眼遠見力・天耳遙聞力・他心徹鑑力・光明遍照攝取衆生力ましますに由つてなり。(一八五頁『教行信証』『行卷』『觀經義疏』)

「勢至菩薩の銘文」(一)

普通私たちは、「念仏」とは口に「南無阿弥陀仏」と称えるもの、つまり「行為」だと思っている。しかし、『無量寿経』に続いて取り上げられる、この「勢至菩薩」の銘文において、念仏とは「えられるもの」であると云われる。念仏をえるときは、念仏のさとりをえることなのだ。

ここで念仏は、「仏」に成るための過程や手段ではない。さとりをえるために念仏が必要なのではなく、仏のさとりが直接に表現されたものが念仏である。念仏において、まだ見ぬ仏の「さとり」に触れているのである。

(元研究員 内記洸)

現代語

「勢至獲念仏円通」というのは、勢至菩薩が「念仏」をえられた、ということ。 「獲」とは、える、という言葉です。えるというものは、つまりは「菩薩」という、まだ「仏」になっているわけではない立場において、しかし確かに「さとり」をえる、ということ。勢至菩薩は、ほかならぬ念仏をえることにおいて、その身のままに阿弥陀如来の「真実のさとり」をえたのだ、と言っているのです。

「大勢至法王子 与其同倫」とは、「五十二菩薩」、つまり五十二の位に区分される、あらゆる「菩薩」が例外なく、勢至菩薩と道を同じくする友だ、というのです。「法王子」と呼ばれる勢至菩薩と、それら、道を求めて歩んでいるすべての人が、「菩薩」として等しく友であることを、「与其同倫」というのです。

「即從座起 頂礼仏足 而白仏言」というのは、勢至菩薩がただちに座から立ち上がった、仏さまの足をいただいて礼拝し、仏さまに次のように申し上げた、というのです。

「勢至菩薩の銘文」(二)

人類の歴史は、「闇」を嫌い、「光」を求めてきた歴史である。昼夜を問わず光であふれた、この現代においてなお、私たちは自らの心のうちに光を求め続けている。

「阿弥陀仏」もまた、さまざまな「光」であると言われるが、われわれ文明の光と違うのは、それが「闇」を絶えず照らし続けようとする光であることだ。照らし続ける光であるということは、照らされ続ける闇があるということにほかならない。私たちが生きている限り、闇はなくなるならない。割り切らずごまかさず、闇に寄り添い続けるところが「阿弥陀」と呼ばれるのだ。(元研究員 内記洸)

現代語

「我憶往昔」というのは、「私は『恒河沙劫』、つまり、数えあげることなどとてもできないような、はてしなく遠い月日を今、思い起こすのです」と、という意味です。

「有仏出世 名無量光」というのは、その遠い遠い昔、「仏」が、私たちが迷い苦しむこの世界に現れて下さったということであり、また、私たちの前に現れて下さったその「仏」とは、「無量の光」、つまり「阿弥陀如来」にほかならないということです。そして、十二の光の「仏」がそのつど十二回にもわたってこちらに現れて下さった、ということ。 「十二如来 相繼一劫」というのです。「十二如来」とはつまり、阿弥陀如来を十二種類の光で表現した名前であって、「相繼一劫」とは、阿弥陀如来が十二の光の仏と成って次々に現れて下さったことを「相繼いで」と言っているのです。「其最後仏名 超日月光」というのは、十二の光の仏のうち、最後にこちらに現れて下さった仏は、「超日月光仏」というお名前である、ということ。 「彼仏教我 念仏三昧」というのは、最後のその超日月光仏が、以下のような「念仏の教え」を勢至菩薩に授けられたということです。

注1 「恒河沙」はガンジス河の砂粒のことで、「劫」は無限に思えるような長さを表す時間の単位。

「救いとは何か」参加者募集中!

2014年度の公開輪読会は「救いとは何か」をテーマに、下記のとおり開催します。当センターの研究員と一緒に

■「救済の欲求—『往生要集』を読む—」(全4回)

趣旨文 法然や親鸞が日本における浄土教の祖師と仰いだのが源信である。比叡山天台宗の学僧たる源信の著した『往生要集』を通して、法然や親鸞はその思索を深めていったと言えるであろう。その時に中心問題となった一つが「菩提心」、すなわち覚りを求める心であった。彼らが『往生要集』から読み取った浄土教の救済とは何ぞ

仏教の聖典をひもとき、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教の言葉に、現代を生きる力を見いだしていきたいと思います。

初めての方もどうぞお気軽にご参加ください。

あったのか、本輪読会ではこのことを「菩提心」をキーワードとして考えていきたい。

期日：2014年11月28日(金)

12月5日(金)、12日(金)、19日(金)

担当：藤原 智(ふじわら さとる) 研究員



■「他力の救済とは何ぞや—『絶対他力の大道』を読む—」(全4回)

趣旨文 清沢満之の没後、法要や集会で唱和されるなど、時代を超え、多くの人々の間で親しまれてきた語録がある。——「絶対他力の大道」。もとは日記として書かれたものが、雑誌『精神界』への掲載にあたり、門弟の編集が加わったため、近年では厳しい批判にもさらされている。しかし、この語録によって清沢の思想の「骨格」は、現代

にまで確かに伝えられてきた。本輪読会では、他の書物で「他力の救済」として語られた言葉を確認しつつ、その「骨格」への肉づけを試みたい。

期日：2015年1月9日(金)、16日(金)

23日(金)、30日(金)

担当：名和達宣(なわ たつり) 研究員



■「浄土教に求められた救い—『観無量寿経』を読む—」(全4回)

趣旨文 『観無量寿経』は仏典中でも豊かなストーリー性を誇る典籍である。悪逆の子、阿闍世にさいなまれる韋提希夫人が「救済」される物語であり、またそれが「未来世の一切凡夫」の「救済」をも開示する展開となっている。広く愛読、研究された『観無量寿経』であるが、中国、韓国、日本において多種多様に解釈されてきた経典でもある。

それは浄土教における救いの解釈の変遷史といえる。本輪読会では、『観無量寿経』を通して浄土教に求められた救いについて探っていく。

期日：2015年2月6日(金)、13日(金)

20日(金)、27日(金)

担当：中村玲太(なかむら りょうた) 研究員



- 時間：いずれも午後6時30分～8時30分
- 資料代：500円 初回受付にてお支払いください。
※テキスト及び資料は当方で準備いたします。
- 会場：東京大学仏教青年会会館ホール
(文京区本郷三丁目・三菱UFJニコス本郷ビル2階)

- お申し込み
親鸞仏教センター公開輪読会2014係までご連絡ください。
定員35名。連続12回の講座ですが途中参加も歓迎です。
親鸞仏教センター 〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7
TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

リレーコラム

「近代教学の足跡を尋ねて」(第一回)

センターから本郷通りを北に50メートルほど行くと交差点(K字路)がある。そこから東に伸びる小道を進むと私立郁文館高校がある。この地には、後に東洋大学となる「哲学館」が明治29年まであった。

周知のとおり、設立者は当派寺院出身の井上円了。円了は東本願寺の国内留学生第1号であった。当時、東本願寺も新時代に適応すべく、殊に人材養成のために労を費やし、その枢要な取り組みが東京に子弟を送る国内留学であった。

円了は、東京大学で「哲学」と出会い、「哲学」を基とした教育の場として湯島に哲学館を設立し、同じく国内留学で学んだ清沢満之も教鞭をとった。この地に哲学館が新築・移転してきたのは明治22年。同じころ、東京大学で夏目漱石と親交を深める正岡子規が、医学博士になったばかりの森鷗外が、このあたりで生活している。

繊細でむき出しの好奇心が、混沌とした知の海にさらされる——思索にふける若者たちの足音が聞こえてきそうな場所である。(大江)



Facebook 始めました。

- Facebook ウェブアドレス
www.facebook.com/shinran.bc
「いいね!」お待ちしております。

行事日程のご案内

- 親鸞思想の解明
日 時：2014年12月17日(水) 18時30分～21時
2015年1月13日(火) 18時30分～21時
2月10日(火) 18時30分～21時
会 場：東京国際フォーラム ガラス棟(G棟)
- ご命日のつどい(毎月第2金曜日)
日 時：2014年12月12日(金) 10時～11時30分
2015年1月9日(金) 10時～11時30分
2月13日(金) 10時～11時30分
会 場：親鸞仏教センター会議室
上記共に、事前申込み不要・無料です。

センター新スタッフの紹介

なかむら りょうた
研究員 中村 玲太

1987年茨城県生まれ。明治大学農学部農業経済学科卒業。東洋大学大学院インド哲学仏教学専攻前期課程修了。